

荘川地域

村芝居

Murashibai

語り手 森下和也

聞き手 山本真紀

企画 高山市

取材日：令和4年10月27日

荘川村芝居について

荘川神社の村芝居は毎年9月14日の晩って決まっています。祭りの前夜祭なんです。この前夜祭をひっくるめてお祭りなんですね。夜やるのがまたいいよね。ちょっと冷えとって。やっぱり夜店が来とったりすると子どもはワクワクするじゃないですか。そして芝居の時間になるとみんな戻ってきて席に座って観るっていうそんな文化なんやね。

芝居は神社の氏子さんごとにやりますね。昔は寒いところから祭りが始まっていったんや。御母衣ダムが出来るときに大きな部落がいくつか沈んだんやけど、9月頭からずっと白川郷まで祭りが順番に続いていったんや、庄川の下流に向かって。9月1日は黒谷白山神社。9月2日は一色白山神社、で、次は野々俣。実は一色白山神社は、若い人が少なくなって1回無くなったけど、前夜祭とはちょっと位置づけは違う形ではあるけど、また復活してきとる。

一説には、昔、お祭りの時期になると日本中闊歩して歩く流しの旅芸人を前夜祭に呼んでいたそうです。いつの間にかそれが村芝居になって、地元根付いていったんではないかということも聞きました。そういう風に文化として根付いたんだと思います。

最近あちこちで歌舞伎が復活しとる傾向にあるけど、ひょっとすると、荘川村芝居も元々は歌舞伎だったかもしれん。歌舞伎と芝居の違いは喋り方なんです。今はマイクとか音響設備があるので普通の喋り言葉でやっても伝わるんですけども、昔、いっぱい人がいるところで喋っても何かわからないうちに済んでしまう。だから、大きさにダンダンダンダンって歌舞伎の喋り方で一字一句大きく喋って大きな動きをすることで、すごいたくさんの人にしっかり伝わるようにやったのが歌舞伎。それで、普通のしゃべり言葉でバツといくのが地芝居ね。

奉納芝居 ～神様ありがとう～

私が作っているのは歌舞伎調じゃなくて、やっぱり芝居。楽しいですよ。私はここまで10本の演目の脚本を作ってきたんですよ。だいたい1時間半から2時間の脚本をゼロから全部作ったんです。それまでは、前座の子供向けの日本昔話みたいなやつを作ってたけど、いよいよ、教える師匠だった方が年をとられて、私にやってくれんかって若連中が頼みに来たんです。始めは断ったんです。伝統を背負うことは私の器では無理って。でも何回か頼みに来られて、その時に去年亡くなられたこの地元の神主さんをやってみえた吉田輝穂さんが「そんなに気にしないでいい。地元の若い奴がこんなに立派に育ったって神様に見てもらふ奉納芝居なんやで。そんなに伝統のことは考えんでもいいからみんな楽しくやればいい」というようなことを言っていたので、ちょっと肩の荷が下りて引き受けました。

昔から神事をやる時には、三方って言って30センチくらいの器にその季節



森下和也

昭和33年3月7日生

プロフィール

荘川町牧戸生まれ。

荘川小学校、荘川中学校、高山工業高校。

バイク屋や自転車の組立を経て、プロパンガスや湯沸かし器や水道配管工事などの設備工事を手掛ける。

の果物とかお酒とか塩とか洗米をお供えます。でもそこにお供えできないものがあります。それは地元で育った氏子の若い人達です。奉納芝居は「神様ありがとうございます。あの時、七五三をした小っちゃい子が成人してこんなに立派になりました」というのを舞台上で神様に見てもらってというお礼です。生前の吉田輝穂さんは「神様こんなに立派に育ててもらってありがとうって文化が残っとるんです」と言われたけど。本当にもっともどかだと思います。

みんなで作る芝居

脚本を書き始めたのは50歳くらいです。実は私、特許を9つ持っているんです。その特許申請の書類は血も涙もない文章でね。胃が痛とうなとったんやけど、そこへちょうど脚本を作ってほしいって話が来て、書き始めたら自由じゃないですか。特許申請のガチガチの文章の羅列で痛めつけられたところへもってきて、脚本って自由じゃんと思ったら糸の切れた凧みたいになってまっ。ちょっと特許申請の反動もあったかな。自由の嬉しさで爆発しましたね。

私はプロじゃないですから、今度の主役はこの人か、ああ三枚目はこの人かって聞いてから作ったら作れなんだ。出来んのですよ。だから誰がどの役をやるかを聞かずに今年は何人出れるか、そのうちの女の人は何人かだけを聞いて作る。後は「よし出来たで」って脚本を渡す。後から、主役はこの人で三枚目はこの人ですって聞いて、こいつに三枚目出来るかなって思ったりします。私の書いた脚本がまるで羽根が生えたかのように変わっていくんですよ。「あれ、こいつ、こんなにすごい才能があったんか」って知らしめられたりして。脚本家冥利につきるっていうか、めっちゃ楽しくなったんです。私の思いと全然違うものが出来て、これ違う方向でみたら面白いねっていうことが毎年起こってきた。私の思った悪役の思いとその人が受け止めた悪役の思いとまた違って。例えば静かに怒るタイプと上からドーンといってしまうタイプといういろいろいるじゃないですか。それは個々の認識に任せた方が面白くなって。読み合わせの時にだいたいキャラクターの説明はします。で、1話はこういう感じで表現してくれればいいですよ。2話はこういう風ですよ。で、このストーリーの中の悪役はこんな感じ。主役はこういう生き立ちで、こんな感じで背負ってきとるんだよって話をしたいのキャラクターの特徴だけ教えたなら、後は若連中にまかせる。演出で「ここはこんな感じ」とか助言はしますが、だいたい自由。これが面白いんですよ。深いんです。毎年毎年、私が考えた脚本を手渡しして、読み込ませて作り上げていく時にワクワクしとる。まあ結果論なんです。

完全オリジナル ～荘川だけの芝居～

既成の脚本もありますが、それだといろいろ著作権法とかに引っかかるんです。それならもう自分で作っちゃおうと。だから完全オリジナルです。いろんな本を読んだり、江戸時代のことを勉強したりしましたよ。

脚本はお盆休みに書きます。こういうストーリーがあったら面白いな、現代にも通用するなって書留めておいて、お盆に入ったら一気に脚本にする。朝ご飯を食べて脚本書きに入ったら、夜ご飯までひたすら書く。腹減ったって思っ



村芝居の様子

たら、夜です。糸の切れた凧みたいでしょ。家内は、ご飯って呼んでも私がなんにも反応ないもんで「あの人、あっちの世界に行っとる」って言っていますね。

脚本の中で喜怒哀楽を全部出せたらいいね。観とる人がワーッと喜んだり、悲しんだり、泣いたり、怒ったりっていうのを全部吐き出して、最後はハッピーエンドで終わったら一番いいです。そういう風になるように脚本を作ってます。10作も脚本を作っておると細部が似てくるんです。ハッピーエンドじゃなければもう何作かできそうだけどね。でも、やっぱりお祭りに関してはやっぱりハッピーエンドかな。

テレビなんかでやっている脚本では真似出来ませんね。何故かという、あれはフィルムなんですよ。「カット」ってやって飛ばして、次の場面に繋げていって作品が出来とる。だからあんなすごいことがテレビだから出来るんですね。でも村芝居は幕を開けたら絶対にその1幕をやらないといけませんが、幕をちょっと閉めてセットを変えて2幕。芝居はテレビのようにバンバン場面を変えてやることはできないですね。実は私もそういうところではジレンマがあってね。ああこの脚本すごくいいけど、絶対に真似できないやと、すごい葛藤しますね。でも仕方ないんや。全3景、4景でやるしかないんやと。じゃーどうすればいいって、工夫するしかない。

だから回り舞台があると良いね。実は、荘川には回り舞台の装置が地下に眠っているんです。今は新しいフローリングが張ってありますが、一色の神社の下にある建物の床に回り舞台の装置があるんですよ。回り舞台があった頃はすごい脚本をやったと思う。回り舞台はフィルムと同じように素早く場面を変えることが出来るんです。すごかったらうなって思います。本当にどれくらいのことをやっていたかタイムスリップして見てみたいね。

すべてが芝居 ～事実は小説より奇なり～

舞台で起きるハプニングもすべてが芝居です。当日だけ髪や衣装を着けるもんで、いつもと違って動きがぎくしゃくするんやが、みんな頑張ってくれたりして。

練習中に読み合わせを重ねていくと、なぜかみんな同じ口調になっていたりするの。「最初に思ったまんまのキャラの言葉でやれ」って言わんならんの。面白いよね。そして、本番になると台詞のスピードがだんだん速くなっていくの。あがってくるとアドレナリンが出てすごい早口になるの。それで言うの。「いいかお前達、絶対に観客の目の前に行くと台詞は早やなる。もうゆっくりだと思っくらしいに喋れ」って。でも、それでも駄目。やっぱり早やなる。忘れんうちに喋ろうと思うから。台詞を間違えないようにって。ただ間違えんようにってだけで、そこには何の感情もないわけよ。プロじゃないもんでそこは仕方ないなって。私もプロじゃないもんで、そこはそこで仕方ないと思って妥協ですね。まあ仕方ないなって。

後からその芝居の録画を観た時に「師匠の言った通りやった」って言うんですよ。「台詞が速い」「なんのイントネーションもない」って自分の芝居を観て失敗したなって反省して。そういうやつらがだんだんとうまくなって



村芝居の様子

いくんですよ。言葉伝いに伝わっていくってことはそういう意味なんですよ。いろんなことを経験して毎年やることで、積みあがっていい役者になっていく。コロナで4年間やってないってことは、かなりその部分を忘れていく。4年前に出ておった役者にしても、その部分を忘れとる。そういった積み重ねが、コロナによって削られていく。だから伝統とか文化って、途切れるとすぐ戻らんのはそういった細かいところの積み重ねがね、戻らん。生の現場でその空気感で行われる。それが祭り。

町娘や浪人、町奉行などいろんな人達を出させんとらんので、いろんな衣装や髪型の見本なんかを見て脚本を書いています。忍者も出しましたよ。いろんな役の人を出演させながら脚本作ってるので、楽しいですよ。観とる人をいかに楽しませようって。いろんな者を出しながら、泣きどころ、憎たらしいところ、喜怒哀楽をみんな入れてね。私は観客を見ておるんです。「お、あの人泣いてくれたな、やった!」とか。あとは台詞間違えんとやってくれるといいなって思いながら、プロンプターとして横におるんですよ。

今までいろんなハプニングがありましたね。一番大丈夫だと思った奴が本番あがってまってポーンって台詞が飛ぶんですよ。固まるとるんですよ。レコード盤の針が飛んだみたいに何遍も同じところに戻ってまう。「そこ飛べ、そこ飛べ」って言ったら、そいつが舞台から飛んだっていう本当の話もありますよ。

いよいよ主役が悪い人のところに斬り込みに行くっていう時に、一番決めの襷掛けをするところがあるんですよ。こう带状にまとめてある襷をバラバラと飛ばして格好良く襷掛けをして行くはずなんやけど、その襷を観客席に投げてしまって。また、それが観客から戻ってきて「ありがとう」っていう場面も本当にあった。そこが面白い。一番の華のところで大失敗しとるんやけど、観とるやつはそれが良かったと。そういうハプニングが起きるの。これは脚本では絶対に作れん。事実は小説より奇なりってね。面白いですわ。

自分は本当に幸せやと思とる。脚本家冥利に尽きる。十数年もこない目に合わせていただいたってことに、はや感謝しとる。

コロナ禍の後…

ただ、来年9月に村芝居ができるかなって心配です。来年はやってほしいね。コロナでブランクが4年あるでしょ。一番心配なのは文化の継承ですよ。毎年やるもんで、口伝えで毎年伝わっていくんやけど、3年やらないとかなり大きい。だいぶん伝わらずに欠けていくところがある思う。来年の9月に出来たとして「あ、そうやったね」「こんなこともあったね、ちょっと頼むわ」ってことが出てくると思う。そのへんはちょっと不安ですね。

私は脚本を若い人に渡してあとは頼むぞってパターンで、芝居全体を仕切っておるわけじゃない。仕切っておるのは若連中の頭取。頭取は毎年変わっていくんですよ。4年間やってなくてどうするって聞いたら、最後に受けた頭取以下みんな4つ年をとってしまうが、芝居はやるって言ってくれる。その後、繋がっていつてくれるかなって、期待とかいろいろです。

以前、こういう話があったんですよ。コロナで何もないから芝居だけやっ



村芝居の様子

てDVDに撮ってみんなに配ってよって。私、一発で拒否したでね。それは祭りじゃない。やっぱり舞台上でやって、観る人が観とって、そこで掛け声があったり、本番で台詞を忘れて「おい、頑張れよ」って言ったり。大事なところでミスしたりとかって、それ全部が祭りなんですよ。そこに到達するまでの空間全部が祭りなんですよ。若連中が練習してきた過程、終わって失敗して「おまえ駄目やったな」って言い合う時間、そのすべてが祭りやと思う。その時間の貴重さと良さをやっぱり残して行って欲しいなど。

少子化の影響

奉納は本当に感謝なんです。日々いろんな人達が健康に生きてこれたって感謝ね。そりゃいろいろあるよ。亡くなった人とか、事故とかデモとかそれを全部含めて、無病息災とは言わんけど、地域の人がみんな元気で豊年満作でいろんな農作物も出来た。それについての感謝。感謝の気持ちっていうのは大事やと思っとる。最近、いろんなところで水害が出るじゃないですか。それも含めてやけど、わりかた、この荘川の地元は災害っていうのがない気がするの。それって神様のご加護のもとで本当に助けてもらっとるって、ふと思ったりするんやさ。科学的にいったらそんなことはないんでしょうけど、あそこの地域は若連中が毎年奉納芝居をやってくれとるで、あそこの地域は守ってやらんならんって。そんなことはないと思うけど、もし神様が守ってくれとるんなら嬉しいなって思う。

村芝居には、こんなに立派に育ったよって意味で18歳から30歳過ぎまでの人が出る。しかし、今はもう、だんだん人がいなくなって、芝居を続けようにも若い人達がいらない。だから、村芝居も学校の先生や駐在さんや高速道路の工事に来とる若い人を引っ張り込んだりしとる。ALTの方が自分の国に帰った後に村芝居のことを話して、新聞に載ったりもしましたね。アラブ系のALTの方は日本の足袋が合わなかった。足が細くて長い。本当にいろんな人に出てもらいましたね。駐在さんにも何人も出てもらった。地域の人は駐在さんには一目置くじゃないですか。ところが村芝居に出てワーッってやるとすごいとけ込みますね。芝居にはまった駐在さんは今までに何人もいますね。いまだに村芝居を観に来るくらい。全く他所の森林管理署の方で若い時に村芝居に出た方は毎年、無償のボランティアで花貼りの手伝いに来てくれるね。そういう地域を超えた連携で成り立っておる。

毎年毎年、幕開けの前に出て行って感謝の言葉を言わんならん。阪神大震災があった時もこんな震災がありましたけども、神様のご加護の元に無事、何もなかったですよ。本当に感謝しようって話をしながら、今年はこんなストーリーでこんな風になって、ピックアップする人、例えばALTの人とかパーアッと出してね。そうやっていろんな人を紹介したりして、この人こうやって頑張ってくれるので皆さん応援してねって。もうちょっと聞きたいけどってところでやめておいて、「じゃー始めます」って行って始めるんです。その時にお客さんにも感謝して、こんなにお花をあげてくれてありがとうって。あのお花で成り立っとるんです。一軒いくらかなくなると、良いと思った人あげてくださって。5千円のところも3千円のところも2万



村芝居の様子

円のところも10万円のところもある。そこには何の制約もありません。不思議なことに、毎年、ぴったりなくらいになるんですよ。今年は参加人数も多いしめっちゃ衣装代も高いし困ったと思うとちゃんとそれくらいのお金が集まるんですね。不思議でしょ。そんなことを十数年続けてきて、こんな風にうまく乗り切れていくんやなど。ただ3年ブランクがあって、4年後に再開した時に花はちゃんと上がるのかなと思ったり。こうやってみるとだいぶ人が減っておるんですよ。戸数の減ったところで花もそんなにあがってこんとこの先出来なくなるかなと。

もちろん蓄えはしておるよ。踊り殿の傷んだ時の修繕とか、屋根が錆びてきた時の葺き替えとか。いつなるとき地震が起きて踊り殿が傷むかもしれん。そういう時の為にストックはさせておるけど。それもだんだんだんだん減ってきておるの。物価も上がってきておるしね。10日とか1週間とか練習するんですけど、いろんな人の協力で出来とるだけで、その協力者はやっぱり氏子の人達なんです。そういう人達が減ってきたらいずれは出来なくなるかもって思います。ただただ好きなだけでは出来ん。でも、若連中がどんどん減つるのは確実で、きっと10年先には村芝居もなくなるかもしれん。なんとかしたいと思つとる。

伝統への想い

今日、絶対に言いたかったことがひとつある。自分もそうやったけど、祭りっていうとわくわくする。自分が小さい頃、祭りになると親がそわそわしとるのを見とった。「あ、何、そんなことやつとるの」「あ、お酒飲んでワイワイ騒いどるな」とか。子どもってお酒飲めんけど、そういう親を見とるんですよ。お祭り楽しそうやなって。そこにいろんな笛や太鼓の音が混じったりして。そういう印象で、ずっと子どもの時から育ってきて、自分が大人になった時に「わあ、お祭りや」ってなるんですよ。そういう、なんていうんやろ。背中を見せて子ども達に伝えてきたものってきつと残ると思う。それを大人だけのものやって閉ざしてしまったら、その次の世代には続かない。確かに大人は子どもを育てるにあたって、ちゃんと世の中のことは教えんならんですよ。駄目なものは駄目って誘導してやらんならんですよ。でも大人もワツと楽しむ時ってあっていいと思う。その時に威厳を持つ必要はなくて、子どもと一緒に騒いでいいと思うの。そういうのがちょっと減ってきたかな。大人も子どもも無礼講ですよってお祭りをする素晴らしさを残して行ってほしいってずっと思つとる。それが地域を繋げるひとつのリングになってくれんかなって。今の時代だから大事にしたいなって思います。

私の若い頃は、すごいやんちゃんおじちゃんとか周りにいっぱいおった。本当にもう無茶苦茶な頑固おやじとか。そういう人って祭りになると、どれくらい一生懸命にやつとるんやさ。あ、あのおじちゃん怖いけどこんなに頑張つて太鼓叩いたりするんやって。そういう人ね、減ってきた。結局、そういう人ってものすごいマンパワー持つとったんやな。今は、そういう人がおらん。世の中見渡すとなんかみんなが一律化してしまった気がして悲しいな。

実はこの話もしておきたいの。「飛騨荘川ふるさとまつり」って荘川にあっ



村芝居の様子

たの。30頭の連獅子やるやつ。私はそのまつりの実行委員会副委員長だったの。荘川まちづくり協議会から補助金をもらいながら、それを貯めてまつりをやってきたんやが、いよいよ30頭連獅子自体を継承していくのが無理になって、今年の春、終了になってしまったんです。終了を決める時に全体の会議があって、氏子総代や獅子の代表もみんな集まったの。最後は華々しくやって終わりたいって会長委員長や私はそういう気持を持っておったんだけど、コロナ禍やでやらない、終了って意見も出ましたね。最後にやるかやらんかの投票したら、もう大半は終了の票で、仕方なく終了です。その投票の前座の意見で、私は本当に傷ついた。なにかって言うと、荘川っていうのは出事が多いんや。若い人も含めてみんな、日曜日も地域のことでいろんなことに出ることが多い。若い人には、消防団に入ってくれとか言うし、村芝居も出んならん。全部が全部、芝居に出たいわけじゃない。それが嫌で帰って来んもんもおるって意見が一部から出たの。あの時に全否定されたような気がして。自分がこうやって一生懸命やってきたことを本当に全否定された気がしたな。「じゃーもうやめちまったらもっと若い人は来るんか」って思ったこともあった。悔しくて寝れなかったこともあった。本当に悔しかったな。

地域がひとつになること

中山間地域はなかなか人が戻って来ないね。今は、本当にもう無くなる危機になっとるかもしれん。やっぱりこの地元から家が本当になくなって、子ども達が他所に行っちゃってお父さんお母さんだけ残ってだんだん年とっていくでしょ。その後は、子ども達が親を引き取って地元の家を壊していく。少ない人数の中でまたやろうと思うとみんなに負担をかけるのな。

このままやと、この中山間地域は人口がどんどん減少していつてまう。今のところ私の力じゃどうしようもない。商工会長って役もやってますけど、それでは止めれんこともやっぱり出てきます。で、なんか、地元の魅力があったら人は定着していくという気持でずっと頑張るとる、本当に。若い人にはこの地域の伝統を続けていつて欲しいって思う。大人が楽しいことは子どもも楽しい。この地域の特色をお祭りの日に一緒に楽しんでほしいな。

今コロナでいろんなことやってないですよ。それが普通になってお祭りも神事だけで済ましてまっとる、この3年。それでも過ぎていく。で、あれば、そんなえらい村芝居なんてしんでもいいんでないかってのが、芝居とか得意じゃない若い人に根付いたんじゃないかっていうことが心配や。どうなるかは来年、封を切ってみないとわからんですね。

さっきも言ったけど、祭りの神髄には、神様に感謝するっていうものがあるかもしれんけど、そこを起点にブワッと人、マンパワーが集中するっていうことかな。あんまりこういうことはないですよ、祭りの他は。職種も全部バラバラの人が集まることなんてそうそうないなって。しかも、終わったらみんなワーッとなっているいろんなことを話して、すごい細かいコミュニケーションが取れて、また来年に向かっていく。そういう流れの中で、ひとつのすごいことをやり続けることによって、地域のみんながひとつになるってことはないですよ、なかなか。そこを私は、とても大事やって思う。